

第43回名古屋春栄会
演目のあらまし

平成24年1月15日

名古屋春栄会事務局

目 次

翁（おきな）	1
弓八幡（ゆみやわた）	3
葛城（かすらき）	4
融（とおる）	5
西王母（せいおうぼ）	6
吉野静（よしのしずか）	7
小督（こごう）	8
養老（ようろう）	9
藤戸（ふじと）	10
弓八幡（ゆみやわた）	11
箆（えびら）	12
野守（のもり）	13
弓八幡（ゆみやわた）	14
老松（おいまつ）	15
東北（とうぼく）	16
鞍馬天狗（くらまてんぐ）	17
六浦（むつら）	18
天鼓（てんこ）	19
〔能のミ二知識	20〕

このリーフレットは、第43回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
演目の記載順は、番組の順です。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

翁（おきな）

【作者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穡を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」とい2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸ひ心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおはしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

<翁舞>

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

弓八幡（ゆみやわた）

【分類】 初番目物（脇能） *神舞

【主人公】 前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：高良ノ神（面・邯鄲男）

【作者】 世阿弥

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

後宇多院に仕える臣下が、如月初卯の男山八幡宮（石清水八幡宮）の如月初卯の神事に陪従として参詣するよう命じられ、八幡宮に向います。やがて八幡宮に着き、参詣しようとする、一人の男を伴い、錦の袋に納めた弓を持った老翁がいます。不思議に思って尋ねると、老翁は「私は長年この八幡宮に仕えているもので、桑の弓を君に捧げようと思ひ、あなたを待っていたのです」と答えます。そして、桑の弓を袋に納めたまま君に捧げるいわれなどを詳しく語ります。さらに、八幡宮のいわれを語り、実は自分は高良の神で、君を守るためにここに現れたと言い、かき消すように消えてしまいます。

<中入>

臣下が神託を伝えるため、都に帰ろうとすると、どこからか音楽が聞こえ、良い香が薫ってきます。するとそこへ、高良〔かわら〕の神がその姿を現し、舞を舞い、御代を祝い、八幡宮の神徳を讃えます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

君を守りの御誓い。もとより定めある上に。殊にこの君の神徳。天下一統と守るなり。げにげに神代今の代の。しるしの箱の明らかに。この山上に宮居せし。神の昔は。ひさかたの。月の桂の男山。さやけき影は所から。畜類鳥類鳩吹く松の風までも。皆神体と現れ。げにたのもしき神ごころ。示現大菩薩八幡の。神徳ぞ豊かなりける。神徳ぞ豊か。なりける。

葛城（かずらき）

【分類】 三番目物（鬘物） *序ノ舞

【主人公】 前シテ：里女（面・増女）、 後シテ：葛城の明神（面・増女）

【作者】 不詳

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

出羽国（山形県）の羽黒山から出た山伏が、大和国（奈良県）の葛城山へとやって来ます。折しも降りしきる雪に悩んでいると、一人の里女が現れ、彼女の庵に案内し、焚火をしてもてなしてくれます。そして、雪の中で集めて束にした木々の細枝を標〔しもと〕と呼ぶのだといい、「標結ふ葛城山に降る雪の、問なく時なく思ほゆるかな」という古歌もあると教えてくれます。山伏は好意を謝し、やがて後夜の勤行を始めようとする、女は、お勤めのついでに加持祈祷をして、自分の三熱〔さんねつ〕の苦しみを助けて下さいと頼みます。山伏は不審に思って、その素性を尋ねると、自分は葛城の神であるが、昔、役〔えん〕ノ行者に命ぜられた岩橋を架けなかったため、不動明王の索に縛られ苦しんでいるとあって消え失せます。

<中入>

そこへ麓の男がやって来たので、葛城山の岩橋の故事について尋ねます。その話を聞き、先程の女の事など思いあわせ、奇特なことと思い、夜もすがら女神のために祈禱します。すると、その修法にひかれて、葛城の神が現れ、三熱の苦を免れた喜びを述べ大和舞を舞い、明け方近くなると、岩戸の内へ姿を隠します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

高天の原の岩戸の舞。高天の原の岩戸の舞。天の香久山も向いに見えたり。月白く雪白く。いずれも白妙の。景色なれども。名に負う葛城の。神の顔かたち。面なや面はゆや。恥かしやあさましや。あさまにもなりぬべき。明けぬ先にと葛城の。明けぬ先にと葛城の夜の。岩戸にぞ入り給う。岩戸の内に入り給う。

融（とおる）

【分 類】五番目物（切能＝貴人物） *早舞

【主人公】前シテ：汐汲みの老人（面：三光尉）、後シテ：源融の霊（面：中将）

【作 者】世阿弥

【あらすじ】（独調の部分…下線部）

東国から京へ上った諸国一見の旅僧が六条河原の院を訪れ有り、休んでいると、そこへ田子を担った老人がやって来ます。僧は、ここは海辺でもないのに汐汲み姿をしているのはどうしてかと尋ねます。すると老人は、ここは塩釜の浦を写した海辺だと答え、その昔に左大臣源融が塩釜の浦を模して造園し、毎日難波の浦から海水を運ばせて、塩を焼かせるという風流を楽しんだが、今はすっかり荒れ果てていると語ります。そして京の山々の名所を指し示しながら教えると、そろそろ汐を汲む頃合いだと見て消え失せます。

<中入>

僧は来合わせたこの辺りの者に、老人は源融の霊だろうと教えられ、弔うよう勧められます。僧は、その夜は夢の出会いを期待しながら旅寝をします。すると貴人姿の融大臣が現れ、名月の下で舞をまい、夜明けと共に消えて行きます。

【詞章】（独調の部分の抜粋）

あら面白の遊楽や。あら面白の遊楽や。そも名月のその中に。まだ初月の宵々に。影も姿も少なきはいかなる謂なるらん。それは西岫に。入り日のいまだ近ければ。その影に隠さるる。たとえば月のある夜は。星の薄きがごとくなり。青陽の春の始めには。霞む夕べの遠山。黛の色に三日月の。影を舟にもたとえたり。また水中の遊魚は。釣針と疑い。雲上の飛鳥は。弓の影とも驚く。一輪もくみならず。万水ものぼらず。鳥は池辺の木に宿し。魚は月下の波に伏す。聞くとも飽かじ秋の夜の。鳥も鳴き。鐘も聞こえて。月もはや。影かたむきて明け方の。雲となり雨となる。この光陰に誘われて。月の都に。入りたもう粧い。あら名残惜しの面影や。名残惜しの。面影。

西王母（せいおうぼ）

【分類】 初番目物（脇能＝女神物） *中ノ舞

【主人公】 前シテ・後シテ：西王母（面・増女）

【作者】 不詳

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

周（中国）の穆王の時代に、帝主催の宴が開かれます。その宴の最中、ある女が桃の枝を持って帝のもとへ現れます。帝は西王母の桃であろうと喜びますが、女は、自分が西王母の化身であり、この世を言祝ぐため、桃の実を持って再び訪れることを予言して消え去ります。

<中入>

人々が様々な管弦を奏して西王母の到来を待ち受けていると、西王母は桃の実を携えた侍女とともに現れます。その桃の実を皇帝に捧げた後、西王母は優雅に舞いながら明け方の雲に紛れて天上へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

花も酔えるや盃の。花も酔えるや盃の。手まずさえぎる曲水の宴かや御川の水に。
戯れ戯るるたおやめの。袖も裳裾もたなびきたなびく。雲の花鳥。春風に和しつつ。
雲路にうつれば。王母も伴ひよじのぼり。王母も伴ひ上るや天路の。行方も知らずぞ。なりにける。

吉野静（よしのしずか）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【主人公】シテ：静御前（面・増または小面）

【作 者】世阿弥

【あらすじ】（今回の仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

源義経が吉野の衆徒の裏切りによって吉野山を落ちたとき、防ぎ矢を仰せつかった佐藤忠信は都道者を装って大講堂での衆徒の詮議の様を窺います。そして、衆徒の詮議の中に入って、頼朝と義経が和解したという噂や義経の武勇を語って義経追撃の矛先を鈍らせます。やがて静御前も出てきて、忠信との打ち合わせどおり、舞の装束で、法楽の舞を舞います。静は忠信と呼吸を合わせて義経の忠心を説き、頼朝との和解を匂わせます。衆徒は静の舞の面白さに時を移し、また義経の従者達の武勇に恐れをなし、ついに一人として義経の追討に赴く者はいませんでした。

【詞章】（今回の仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

賤やしづ。しづのおだまきくりかえし。昔を今に。なすよしもがな。大かた舞の面白さに。大かた舞の面白さに。時刻を移して進まぬもありけり。または判官の武勇におそれてよし義経をば落とし申せと。僉議を加うる衆徒もありけり。さるほどに。時移って。主君も今は忠信が。かしこき謀にて難なく君をば。落とし申し。心静に願成就して。都へとてこそ。かえりけれ。

小督（こごう）

- 【分類】 四番目物（現在物＝侍物） ＊男舞
【主人公】 シテ：源仲国（直面〔ひためん＝素顔〕）
【作者】 金春禅竹

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

小督の局は、高倉帝の深い寵愛を受けていましたが、平清盛の娘徳子が帝の中宮となったので、清盛の権勢をはばかりて宮中を去り、姿を隠してしまいます。高倉院はそのことを日夜嘆いておられました。小督が嵯峨野のあたりにいるという噂をお聞きになり、早速捜し出すように勅命を弾正大弼源仲国のもとへおつかわしになります。折から8月十五夜、小督はきっとことを引かれるでしょうから、その音を便りに捜すことにしようとお答えすると、院は寮の御馬を下さったので、仲国はそれに乗って急いで出かけます。

<中入>

嵯峨野の小督の隠れ家では、悲しい思いを琴の音でまぎらわそうと、局は侍女たちと語り合っています。仲国は名月の嵯峨野を馬で馳せめぐりますが、ただ片折戸をしたところというだけが目当てなので、捜しあぐねています。やがて法輪寺のあたりで、かすかに琴の音が聞こえてくるので、耳をすますと「想夫恋」の曲です。その音をたよりに、局の隠れ家を尋ねあてますが、小督は戸を閉じて中へ入れようとしません。侍女のとりなしで対面した仲国は、院の御文を渡し、御返事を請います。小督は院の思召しに感泣します。そして仲国はなごりを惜しむ酒宴に舞を舞い、小督に見送られて都に帰ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

木枯に。吹き合わすめる。笛の音を引き留むべき言の葉もなし。言の葉もなし。言の葉もなし。言の葉もなき君の御心。われらが身までも物思いに。立ち舞うべくもあらぬ心。今は帰りて嬉しさを。何に包まん唐衣豊に。袖打ち合わせ御暇申し。急ぐ心も勇める駒に。ゆらりとうち乗り。帰る姿の跡はるばると。小督は見送り仲国は。都へところ。帰りけれ。

養老（ようろう）

【分類】初番目物（脇能） ＊神舞

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：山神（面・邯鄲男）

【作者】世阿弥

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

初夏に美濃国（岐阜県）本巢郡に霊水が湧き出るという報告があったので、雄略天皇の勅命を受けて勅使が下向します。一行が養老の滝のほとりに着くと、老人と若者の二人のきこりがやって来ます。勅使はこれこそ話に聞く養老の親子であろうと思って尋ねると、果たしてそうでした。老人は問われるままに養老の滝と名づけられたいわれを物語ります。次いで老人は勅使を滝壺に案内し、霊泉をほめ、他の霊水の例を挙げつつ、この薬の水の徳をたたえます。すべてを見聞した勅使が感涙を流し、この由を奏聞しようと都に帰ろうとすると、天から光がさし、花が降り、音楽が聞こえ、ただならぬ様子となります。

<中入>

そこへ土地の者が来て養老の滝のいわれを語り、滝の水を飲んで若返りの様を見せます。続いて養老の山神が出現し、清らかな水をたたえ、神仏はもとより同体であり、共に衆生を救おうとの御誓願であって、時として神として現れ、仏として現れるのであると述べます。そして、峰の嵐や谷川の音を音楽として舞を舞い、太平の世を祝して神の国に帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

松陰に。千代をうけたる。みどりかな。さもいさぎよき山の井の水。山の井の水。山の井の。水とうとうとして。波悠々たり。治まる御代の。君は船。君は船。臣は水。水よく船を。浮め浮めて。臣よく君をあおぐ御代ぞといく久しきも。尽きせじや尽きせじ。君に引かるる玉水の。上澄む時は。下も濁らぬ滝津の水の。浮き立つ波の。返すがえすも。よき御代なれや。よき御代なれや。万歳の道に帰りなん。万歳の道に帰りなん。

藤戸（ふじと）

【分類】四番目物（執心男物）

【主人公】前シテ：漁師の母（面・曲見）、後シテ：漁師の亡霊（面・瘦男）

【作者】不詳

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

源平合戦の時、備前国（岡山県）藤戸の合戦で、先陣の功のあった佐々木盛綱は、恩賞によりその辺りの土地を賜わり、新領主としてお国入りします。そして、まず領民の声を聞くべく、訴えのある者は申し出るように、従者に触れさせます。すると、一人の老婆がやって来て、罪もない我が子が、盛綱に殺された恨みを述べます。盛綱は一度は否定しますが、老婆の激しい追及と嘆きに、隠し切れず、去年3月の藤戸の合戦の折、手柄を立てようと、土地の漁師に浅瀬を聞き出しますが、他の者にも同じように教えられることを恐れて、その男を殺したことを告白します。そして、その時の様子を語り、その男を沈めた場所を話します。老婆は悲しみを新たに、親子の情を述べ、自分も殺してほしいと詰め寄ります。盛綱は前非を悔いて、老婆を慰め、下人に命じて自宅まで送らせます。

<中入>

盛綱は早速に漁師を弔うべく、法要を行うことや一七日の間殺生禁断の由を指示し、自らも読経します。すると漁師の亡霊が現れ、盛綱は恩賞を賜わり、そのもととなった自分は殺された理不尽を責め、身の不運を嘆きます。そして、殺された時の有様を再現して見せ、悪龍となって恨みを晴らそうと思ったが、意外にも回向を受けたので成仏の身になったと告げ、消え去ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

おん喜びも我故なれば。いかなる恩をも。給ふべきに。思いのほかに一命を。召されし事は馬にて。海を渡すよりは。これぞ稀代の例なる。さるにても忘れがたや。あれなる。浮き洲の岩の上に。我を連れて行く波の。氷のごとくなる。刀を抜いて。胸のあたりを。刺し通し刺し通さるれば肝魂も、きえきえとなる所を。そのまま海に。押し入れられて。千尋の底に。沈みしに。おりふし引く汐に。おりふし引く汐に。引かれて行く波の。浮きぬ沈みぬ埋れ木の。岩の。はざまに。流れかかって。藤戸の水底の。悪竜の水神となって恨み為さんと思いに。思わざるに御弔らいの。御法のみ舟に乗りをえて。すなわち弘誓の舟に浮かめば。水馴竿。さし引きて行く程に。生死の海を渡り。願いのごとくにやすやすと。彼の岸に。至り至りて。彼の岸に。至り至りて。成仏得脱の身となりぬ。成仏の身とぞ。なりにける。

弓八幡（ゆみやわた）

【分類】 初番目物（脇能） *神舞

【主人公】 前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：高良ノ神（面・邯鄲男）

【作者】 世阿弥

【あらすじ】（連吟の部分…下線部）

後宇多院に仕える臣下が、如月初卯の男山八幡宮（石清水八幡宮）の如月初卯の神事に陪従として参詣するよう命じられ、八幡宮に向います。やがて八幡宮に着き、参詣しようとする、一人の男を伴い、錦の袋に納めた弓を持った老翁がいます。不思議に思って尋ねると、老翁は「私は長年この八幡宮に仕えているもので、桑の弓を君に捧げようと思い、あなたを待っていたのです」と答えます。そして、桑の弓を袋に納めたまま君に捧げるいわれなどを詳しく語ります。さらに、八幡宮のいわれを語り、実は自分は高良の神で、君を守るためにここに現れたと言い、かき消すように消えてしまいます。

<中入>

臣下が神託を伝えるため、都に帰ろうとすると、どこからか音楽が聞こえ、良い香が薫ってきます。するとそこへ、高良〔かわら〕の神がその姿を現し、舞を舞い、御代を祝い、八幡宮の神徳を讃えます。

【詞章】（連吟の部分の抜粋）

しかるに神功皇后。三韓をしたがえ給いしより。同じく応神天皇の御聖運。御在位も久しく國富み民も。豊かに治まる天が下。今に絶えせぬ。例とかや。上雲上の月卿より。下萬民に至るまで楽しみの声つきもせず。しかりとは申せども。君を守りの御恵み。なおも深き故により。欽明。天皇の御宇かとよ。豊前の國。宇佐の郡。蓮台寺の麓に。八幡宮と現れ。八重旗雲をしるべにて。洛陽の。南の山高み。曇らぬ御代を守らんとて。石清水いさぎよき靈社と現じ。給えり。されば神功皇后も。異国退治の御ために。九州。四王寺の峯において。七か日の御神拝。例も今は久かたの。天の岩戸の神あそび。群れいて謡うや榊葉の。青和幣白和幣とりどりなりし神靈を。遷すや神代の跡すぐに。今も道あるまつりごと。あまねしや神籬の。おがたまの木枝に。金の鈴を結びつけて千早ふる神遊び。七日七夜の御神樂。まことに天も納受し。地神も。感應の海山治まる御代に立ち帰り。国土を守り給うなる。八幡三所の神徳ぞめでたかりける。

箬（えびら）

【分類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【主人公】前シテ：里人（直面）、後シテ：梶原源太の霊（面・冠形童子）

【作者】世阿弥

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

九州から都見物を志す一人の旅の僧が、早春の頃、須磨の浦の生田川のほとりに着きます。ちょうどそこに、色あざやかに咲いている梅の木があるので、来合わせた男に問うと、箬の梅だと答えるので、どうしてそういう名がついたのかと尋ねます。その男は源平の合戦の時、源氏方の若武者梶原源太景季が折から咲き誇っていた梅の花を手折って、笠印の代わりに箬にさし、めざましい活躍をしたので、箬の梅の名が残ったとその由来を語ります。さらに一ノ谷の合戦の様子を詳しく物語るのので、僧が不審がると、男は自分は景季の亡霊だと名乗って、たそがれ時の梅の木陰に消え失せます。

<中入>

土地の者から重ねて箬の梅の話聞いた僧は、奇特の思いに立ち去りかね、木陰で仮寝をしていると、夢に武者姿の影季が現れ、修羅道での苦患を見せ、また往昔の合戦でのめざましい戦ぶりを見せたかと思うと、夜明けと共に回向を頼んで消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

山も震動。海も鳴り。雷火も乱れ。悪風の。紅焰の旗をなびかし。紅焰の旗をなびかして。閻浮に帰る生田河の。波を立て水をかえし。山里海川も。みな修羅道の巷となりぬ。こはいかにあさましや。しばらく心を静めて見れば。所は生田なりけり。時も昔の春の。梅の花盛りなり。ひと枝手折りて箬にさせば。もとよりみやびたる若武者に。あいおう若木の花かずら。かくれば箬の花も源太も。我先駆けけん先駆けけんとの。心の花も梅も。散りかかって面白や。敵のつわものこれを見て。あっぱれ敵よ逃すなとて。八騎が中にとりこめらるれば。兜も打ち落とされて。大童の姿となつて。郎等三騎に後ろをあわせ。向う者をば。拝み打ち。まためぐりあえば。車斬り。蜘蛛手かく繩十文字。鶴翼飛行の秘術を尽くすと見えつるうちに夢覚めて。しらしらと夜も明くれば。これまでなりや旅人よ。暇申して花は根に。鳥は古巣に帰る夢の。鳥は古巣に帰るなり。よくよく吊いてたびたまえ。

野守（のもり）

【分類】 五番目物（切能＝鬼神物） ＊舞働

【主人公】 前シテ：野守（面・三光尉）、後シテ：鬼神（面・小癩見）

【作者】 世阿弥

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

出羽国（山形県）の羽黒山からやって来た山伏が、大峰葛城山へと参る途中、大和国（奈良県）春日の里に着きます。そして、誰かに、このあたりの名所について聞きたいものだと思っていると、ちょうど一人の老人がやって来ます。そこで、近くにあったいわれのありそうな池について尋ねます。すると老人は、私のような野守が姿を写すので、この池は「野守の鏡」と呼ばれているが、本当の「野守の鏡」というのは、昼は人となり、夜は鬼となってこの野を守っていた鬼神の持っていた鏡のことだと答えます。さらに、「はし鷹の 野守の鏡 得てしかな 思い思わずよそながら見ん」という和歌は、この池について詠まれたのかと山伏が聞くと、老人は、昔この野で御狩のあった時、御鷹を逃がしたが、この水の姿が写ったので行方がわかったから、その歌が詠まれたのだと語ります。山伏がまことの野守の鏡を見たいものだというと、鬼神の持つ鏡を見れば、恐ろしく思うであろうから、この水鏡を見なさいと言い、老人は塚の中へ姿を消します。

<中入>

山伏は、ちょうど来合わせた土地の人から、野守の鏡の名の由来などを再び聞かされ、先の老人は、野守の鬼の化身であろうと告げられます。そこで、この奇特を喜んで塚の前で祈っていると、鬼神が鏡を持って現れ、天地四方八方を写して見せた後、大地を踏み破って奈落の底へと消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

東方。降三世明王もこの鏡にうつり。また南西北方を映せば。八面玲瓏と明きらかに。天を映せば。非想非非想天までくまなく。さてまた大地をかがみ見れば。まず地獄道。まずは地獄の有様をあらわす。一面八丈の浄玻璃の鏡となって。罪の軽重罪人の呵責。打つや鉄杖のかずかずことごとく見えたり。さてこそ鬼神に横道を正す。明鏡の宝なれ。すわや地獄に帰るぞとて。大地をかつぱと踏み鳴らし。大地をかつぱと。踏み破って。奈落の底にぞ。入りにける

弓八幡（ゆみやわた）

【分類】 初番目物（脇能） *神舞

【主人公】 前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：高良ノ神（面・邯鄲男）

【作者】 世阿弥

【あらすじ】（独吟の部分…下線部）

後宇多院に仕える臣下が、如月初卯の男山八幡宮（石清水八幡宮）の如月初卯の神事に陪従として参詣するよう命じられ、八幡宮に向います。やがて八幡宮に着き、参詣しようとすると、一人の男を伴い、錦の袋に納めた弓を持った老翁がいます。不思議に思って尋ねると、老翁は「私は長年この八幡宮に仕えているもので、桑の弓を君に捧げようと思い、あなたを待っていたのです」と答えます。そして、桑の弓を袋に納めたまま君に捧げるいわれなどを詳しく語ります。さらに、八幡宮のいわれを語り、実は自分は高良の神で、君を守るためにここに現れたと言い、かき消すように消えてしまいます。

<中入>

臣下が神託を伝えるため、都に帰ろうとすると、どこからか音楽が聞こえ、良い香が薫ってきます。するとそこへ、高良〔かわら〕の神がその姿を現し、舞を舞い、御代を祝い、八幡宮の神徳を讃えます。

【詞章】（独吟の部分の抜粋）

神まつる。日も二月の今日とてや。のどけき春の。朝ぼらけ。花の都の空なれや。雲もおさまり。風もなし。君が代は千世に八千代にさざれ石の。巖となりて苔のむす。松の葉色も常磐山。緑の空ものどかなる。春の日影はあまねくて。君安全に民厚く関の戸ざしもささざりき。もとよりも君を守りの神国に。わきて誓いもすめる世の。月かげろうの石清水たえぬ流れの末までも。生けるを放つ大悲の光。げにありがたき。例かな。神と君と道すぐにあゆみを運ぶこの山の。松高き枝もつらなる。鳩の峯。枝も連なる鳩の峯。くもらぬ御代は久方の。月の桂の男山げにもさやけき影に来て。君万才と祈るなる。神に歩みを運ぶなり。神に歩みを。運ぶなり。

老松（おいまつ）

【分類】初番目物（脇能＝老神物） *真ノ序ノ舞

【主人公】前シテ：老人（面・小尉）、後シテ：老松の神（面・石王尉）

【作者】世阿弥

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

都の西の方に住む梅津の某は、北野天満宮の夢のお告げを蒙り、筑紫国（福岡県）の安楽寺へ参詣することにします。はるばると旅をして、菅原道真の菩提寺である安楽寺へ着くと、老人と若い男がやって来て、梅と桜のことを述べ、花盛りの梅に垣を作ります。梅津の某は、彼等に言葉をかけ、有名な飛梅はどれかと問うと、神木であるから紅梅殿と崇めなさいとたしなめられ、同じく神木である老松についても教えられます。さらに梅津の某の頼みで、社殿の周辺の景色を述べ、松や梅が天神の末社として栄えていることを示し、中国では、梅は文学を好むので「好文木」といわれ、松は秦の始皇帝の雨やどりを助けたので「大夫」の位を授けられた故事などを教えたあと、神隠れします。

<中入>

おどろいた梅津の某は、供の者に土地の人を呼びにやらせ、その人から詳しく道真の事蹟や道真を慕って飛んできた梅、後を追ってきた松の話を聞きます。里人の勧めで梅津の某の一行は、松陰で旅寝をして神のお告げを待ちます。すると、老松の神霊が、紅梅殿に呼びかけながら登場し、のどかな春を祝って舞をまい、君の長寿を祝い、御代の永遠をことほぎます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

さす枝の。さす枝の。梢は若木の花の袖。これは老木の神松の。これは老木の神松の。千代に八千代に。さざれ石の。巖となりて。苔のむすまで。苔のむすまで。松竹。鶴鶴の。齡をさずくるこの君の。ゆくすえ守れと我が神託の。告を知らする。松風も梅も。久しき春こそ。めでたけれ。

東北（とうぼく）

【分類】 三番目物（鬘物） *序ノ舞

【主人公】 前シテ：都の女（面・小面）、後シテ：和泉式部の霊（面・小面）

【作者】 世阿弥

【あらすじ】（仕舞[クセ]の部分…下線部）

東国より都へ上って来た旅僧が、東北院の和泉式部の住居跡を訪れます。折から花ざかりの一本の梅の木を見て、感じ入っていると、美しい一人の里女が現れて、話しかけてきます。そして、この梅は、今は「和泉式部」、「好文木」、「鶯宿梅」などさまざまに呼ばれているが、以前ここが上東門院の御所であった頃、和泉式部が植えて、「軒端の梅」と名付けたのだと、その由緒を語り、また、あの方丈は式部の寢所をそのまま残したものであると語ります。そして、花も、昔の主人である和泉式部を慕うかのように、年々に色も香も増して咲き続けているというので、旅僧が感心すると、自分こそ、この梅の主の和泉式部であると述べて、花の陰に消え失せます。

<中入>

旅僧は、門前の者からも和泉式部の物語を聞き、梅の木陰で夜もすがら読経します。すると、式部の霊が、ありし日の美しい上臈の姿で現れます。そして、昔、御堂関白藤原道長が、今あなたが読誦している法華経を高らかに誦しながら、この門前を通られるのを聞いて、「門の外 法の車の音聞けば われも火宅を 出でにけるかな」と詠んだが、その功德により、死後、火宅の苦しみをのがれ、歌舞の菩薩になったと語ります。さらに和歌の徳や、東北院の霊地であることを讃え、美しい舞を舞って、やがて暇を告げて方丈に入ったかと思うと、僧の夢は覚めます。

【詞章】（仕舞[クセ]の部分の抜粋）

所は九重の。東北の霊地にて。王城の鬼門を守りつゝ。悪魔を払う雲水の。水上は山陰の鴨川や。末白河の浪風も。潔きひびきは。常楽の縁をなすとかや。庭には。池水を湛えつゝ。鳥は宿す池中の樹。僧は敲く月下の門。出で入る人跡かづかづの。袖をつらね裳を染めて。色めく有様はげにげに花の都なり。見仏聞法の数数。順逆の縁はいやましに。日夜朝暮におこたらず。九夏三伏の夏たけて秋きにけりと驚かす。潤底の松の風。一声の秋を催して。上求菩提の機を見せ。池水に映る月陰は。下化衆生の相を得たり。東北陰陽の。時節もげにと。知られたり。

鞍馬天狗（くらまてんぐ）

【分類】五番目物（天狗物） ＊舞働

【主人公】前シテ：山伏（直面）、後シテ：大天狗（面・大癒見）

【作者】宮増

【あらすじ】（今回の独吟の部分…下線部）

鞍馬山の奥、僧正が谷に住む山伏が、鞍馬寺の人々の花見があると聞いてやって来ます。一方、西谷の能力が、東谷の僧のもとに花見への招きの文を届けます。

東谷の一行は、その能力と共に西谷に来て、盛りの花を眺め、西谷の能力も稚児たちの慰みにと小舞を舞います。そこへ山伏が忽然と姿を現します。なんとなく興をそがれた一行は、そのまま帰ってしまいます。一人の稚児が残って、山伏に声をかけ一緒に花を見ようといいます。山伏はこの少年が源氏の頭領の三男の沙那王（牛若丸）であることを知り、その境遇に同情し、花の名所を案内してまわります。牛若が好意に感謝してその名を尋ねると、山伏はこの山に住む大天狗であると名乗り、兵法を伝えるから平家を滅ぼすように勧め、明日の再会を約して飛び去ります。

<中入>

翌日、牛若が頭紋紗のはなやかな直垂姿で僧正が谷に来ると、大天狗が全国の名だたる天狗を引き連れて現れます。そして張良の故事を語り、兵法の秘伝を授け、夕刻になり、行く末の武運を守る事を約して消えうせます。

【詞章】（今回の独吟の部分の抜粋）

そもそもこれは。鞍馬の奥僧正が谷の。大天狗なり。まずおん供の天狗は。たれたれぞ筑紫には。彦山の豊前坊。四州には。白峰の相模坊。大山の伯耆坊。飯綱の三郎富士太郎。大峰の前鬼が一党。葛城高天。よそまでもあるまじ。辺土においては。比良。横川。如意が岳。我慢高雄の峰に住んで。人のためには愛宕山。霞とたなびき雲となって。月は鞍馬の。僧正が。谷を響かし峰を動かし。嵐こがらし滝の音。天狗倒しはおびたたしや。

六浦（むつら）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） *序ノ舞

【主人公】前シテ：里女（面：小面）、後シテ：楓の精（面：小面）

【作 者】金春禅竹（?）

【あらすじ】（今回の仕舞[キリ]の部分…下線部）

都の僧が東国行脚の途中、相模国（神奈川県）六浦の称名寺に立ち寄ると、折りしも山々の木々が今を盛りと紅葉しているのに、この寺の一本の楓だけが少しも紅葉していないので、不審を思ってみていると、ひとりの里の女が現れます。女は、昔、鎌倉中納言為相卿がこの寺に来た時、この木だけが山々に先立って紅葉しているを見て、和歌を一首詠じたところ、この木は喜び、功成り名を遂げた上は身を退くのが天の道と信じて、それ以来常緑樹のようになったのです、実は私は楓の精であると言って秋草の中に消え失せます。

<中入>

その夜、僧がここで過ごしていると、楓の精が現れて、草木も成仏できる仏徳を称えて舞をまいますが、明け方になると影の如く消えてしまいました。

【詞章】（今回の仕舞[キリ]の部分の抜粋）

秋の夜の。千夜を一夜に。重ねても。言葉残りて。鳥や鳴かまし。八声の鳥も数数に。八声の鳥も数数に。鐘も聞こゆる。明け方の空の。所は六浦の浦風山風。吹きしおり吹きしおり。散るもみじ葉の。月に照り添いて。からくれないの庭の面。明けなば恥かし。暇申して帰る山路に。行くかと思えば木の間の月の。行くかと思えば木の間の月の。かげろう姿と。なりにけり。

天鼓（てんこ）

- 【分類】 四番目物（遊樂物・唐物） *楽
【主人公】 前シテ：天鼓の父・王伯（面・小尉）、
後シテ：天鼓の霊（面・童子）
【作者】 不詳

【あらすじ】（今回の仕舞の部分…下線部）

昔、中国に王伯王母という夫婦がいました。妻は天から鼓が降り下り、胎内に宿る夢を見て一子を生み、その名を天鼓とつけました。その後本物の鼓が天から下り、その子供の手に入ります。それは実に美しい音を出します。その噂を伝え聞いた天子が、鼓を献上するように命じます。少年はそれを拒んで山中に逃げたが、探し出され、鼓は召し上げられ、その身は呂水に沈められてしまいます。宮中に運び込まれたその鼓は、その後、誰が打っても音を出しません。[ここまでは能では演じられません]

そこで、勅使が少年の老父のもとにつかわされ、宮中へ来て鼓を打つように命ぜられます。愛児を失った老父は、日夜悲嘆にくれています。勅命を受け、自分も罰せられる覚悟で参内します。恐れかつ懐かしむ心で鼓を打つと、不思議にも妙音を発しました。この奇跡に、天子も哀れを感じ、老父に数多の宝を与えて帰させます。

<中入>

そして天鼓のために、呂水の堤で、追善の管絃講（音楽法要）を行います。すると天鼓の霊が現われ、今は恨みも忘れて手向けの舞樂を謝し、自ら供えられた鼓を打ち、樂を奏し、喜びの舞を舞って興じます。

【詞章】（今回の仕舞の部分の抜粋）

おもしろや時もげに。おもしろや時もげに。秋風楽なれや松の風。柳葉を。払って月も涼しく。星も相逢う空なれや。烏鶺の橋のもとに。紅葉を敷き。二星の館の前に風冷やかに夜もふけて。夜半楽にも早なりぬ。人間の水は南。星は北にたんだくの。天の海面雲の波。立ちそうや呂水の堤の。月にうそむき水にたわむれ。波をうがち。袖を返すや。夜遊の舞樂も時去りて。五更の一点鐘も鳴り。鳥は八声のほのぼのと。夜も明け白む時の鼓。数は六つの巷の声に。また打ち寄りて現か夢か。またうち寄りて現か夢。幻とこそなりにけれ。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>